

モンゴル・ウランバートル近郊に暮らす遊牧民の生活環境に関する研究

日大生産工

川岸梅和

日大生産工

○広田直行

モンゴル科学技術大

I. ゴンチクバト

日大生産工

北野幸樹

日大生産工（院）杉本弘文

1. 研究の背景

20 世紀に入り、モンゴルは「世界で 2 番目の社会主義国家」になる（1921 年）と共に 1924 年に憲法を制定し、モンゴル人民共和国の宣言をした。その後モンゴルは、ソビエト連邦の指導の下で社会主義国として発展したが、1990 年に民主化が断行され、現在は市場経済体制下にある。

新しい経済体制への移行に伴い、国有資産の分配が実行され、国が経営していた多くの機関や施設が私有化されると共に、土地や住宅の私有化と売買も認められるようになった。

モンゴル国においては、社会主義体制から民主主義体制への移行による社会的変容に加え、現在においても国民の約 35% が草原のゲルに暮らしている「遊牧国家」とあるという固有の特性をもっている。

特に近年、首都ウランバートル市においては地方からの人口流入が顕著であり、人口増加率は 1990 年から 2000 年の約 10 年間で約 132% に上り、現在もウランバートル市の人口は急激に増加している。

(Fig. 1) 1999 年から 2001 年に起こったゾド（雪害）やガン（干害）^{注1)} などにより大量の家畜を失い、遊牧を棄てた遊牧民の多くが都市に職を求めて流入していることは、重大な社会問題となっている。

現在、ウランバートル市は不法に移住した人々を含めると、人口 100 万人の都市になっていると言われている。このような流入者の生活を支えるものは市街地周辺部の「定住ゲル」である。本来移動用の住居として用いられてきたゲルが都市に持ち込まれ、「定住ゲル地区」を構成し、都市周縁部に拡大している。

このように、草原のゲルに住む伝統的な遊牧社会の中で暮らしてきた遊牧民は、現在徐々に近代化への流れの中で、都市化・定住化へと進む意識が強まってきている。

しかしながら、モンゴル国の伝統的な遊牧社会は、自然環境や家畜と密接に関わり合いながら、自ら移動し、草原地を利用していくことで環境に適応すると共に、

自然環境への環境負荷が極めて少ない資源循環型の生活体系を有している。

2. 研究の目的

本研究では、固有の地域環境・資源に立脚した資源循環型環境をどのようにして保持し展開していくことが可能か、遊牧民が創り出す資源循環型社会における地域特性に立脚した持続可能な生活・居住環境づくりと共生に関する計画的な方法論の検討を行うために、遊牧民に対するアンケート調査を行った。それにより遊牧民の生活意識、生活実態・活動実態、並びに環境共生のシステム・手法を明らかにし、遊牧民固有の資源循環型生活環境をどのようにして保持し展開していくことが可能かを検討し、人・活動・空間の相互浸透関係に立脚したモンゴル独自の生活空間計画の方向性を明らかにすることを目的としている。

本稿では、ウランバートル市近郊に暮らす遊牧民に対するアンケート調査を基に、遊牧民の生活意識・活動の傾向的特性を明らかにすることにより、伝統的な遊牧社会の中で育まれてきた環境負荷の少ない生活体系と生活・コミュニティ意識の関係性について考察し、遊牧生活における生活環境に関する基礎的知見を得ることを目的としている。

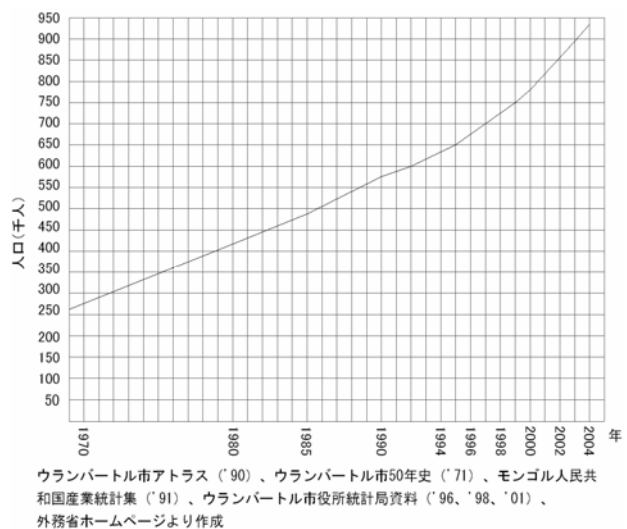


Fig. 1 ウランバートル市の人口推移

Study on Living Environment of Mongolian Nomad who Lives in the Suburbs of Ulaanbaatar, Mongolia

Umekazu KAWAGISHI, Naoyuki HIROTA, Ishjamts GONCHIGBAT, Koki KITANO, Hirofumi SUGIMOTO

3. 調査概要

本研究ではウランバートル市近郊に暮らす遊牧民を対象として、2006年8月に遊牧民の生活意識、生活・コミュニティ活動等に関するアンケート調査及びヒアリング調査を行った。調査を行った地点はFig. 2に示す通り、調査地AとBであり、各々ウランバートルから約50 km及び80 km圏域に位置している。

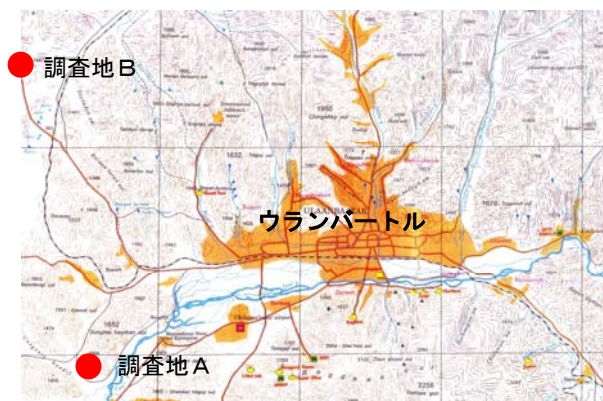


Fig. 2 調査地

4. 遊牧民を対象としたアンケート調査

4-1. アンケート調査の概要

アンケートの配布・回収の方法は、調査対象とした遊牧民世帯を直接訪問し、調査の主旨を説明した上でアンケートを配布すると共に、回収についても配布と同様に各世帯を直接訪問し回収した。尚、アンケート調査は各世帯を対象に1部ずつ配布し、世帯主より回答を得た。

遊牧民は、数世帯が集まってホト・アイル^{注2)}と呼ばれる1つのグループを構成し、遊牧生活を行っていることから、本稿では遊牧生活を共にしている世帯・グループ単位でアンケート調査の結果を整理し、生活活動・行為の実態と生活意識の傾向的特性を明らかにする。

4-2. 調査対象遊牧民世帯の属性

1) グループ構成 (Table 1)

アンケート及びヒアリング調査よりグループ分類を行った結果、調査対象遊牧民世帯は1グループを1世帯から4世帯で構成していることが判明した。

1世帯で1グループを構成している事例（以下、1F1Gと記述）は14事例、2世帯で1グループを構成している事例（以下、2F1Gと記述）は10事例、3世帯で1グループを構成している事例（以下、3F1Gと記述）は5事例、4世帯で1グループを構成している事例（以下、4F1Gと記述）は2事例である。

2) 家族構成 (Table 1)

平均世帯人数は概ね5～6人の世帯が多く、平均子ども人数は3～4人となっている。平均世帯人数・平

均子ども人数共に、各グループで大きな差異はみられない。また、世帯主の平均年齢は40代後半、配偶者の平均年齢は40代前半が多くなっている。

収入源となる職業については約9割の世帯が「牧畜業」であり、その他の中で「年金受給」の世帯がみられた。

Table 1 グループ構成及び家族構成

	1F1G	2F1G	3F1G	4F1G	合計
事例数 (世帯数)	14 (14)	10 (20)	5 (15)	2 (8)	31 (57)
平均世帯 人数(人)	5.4	4.8	5.9	5.4	5.4
世帯主 平均年齢(歳)	52.0	47.6	45.9	47.1	48.1
配偶者 平均年齢(歳)	47.2	43.2	44.1	44.1	44.7
平均子ども 人数(人)	2.9	2.6	3.3	2.9	2.9

4-3. 家畜の保有状況と利用状況 (Fig. 3)

各グループ毎の家畜の保有状況に関しては、平均家畜保有数は1F1Gでは320.4頭/世帯(320.4頭/G)、2F1Gでは146.11頭/世帯(289.2頭/G)、3F1Gでは299.9頭/世帯(982.3頭/G)、4F1Gでは553.6頭/世帯(2214.0頭/G)となっている。概ねグループの人数に比例して家畜数も増加しているが、1F1Gではグループによって家畜数にばらつきがみられる。また、グループの人数と家畜数の間には少なからず関係性がみられる。

また、家畜の利用状況については食用(肉・乳製品)以外に、「移動時の乗り物として」「衣類・道具等の原料として」「糞をストーブの燃料として」等がみられ、家畜の全ての部位を多用途に利用している。

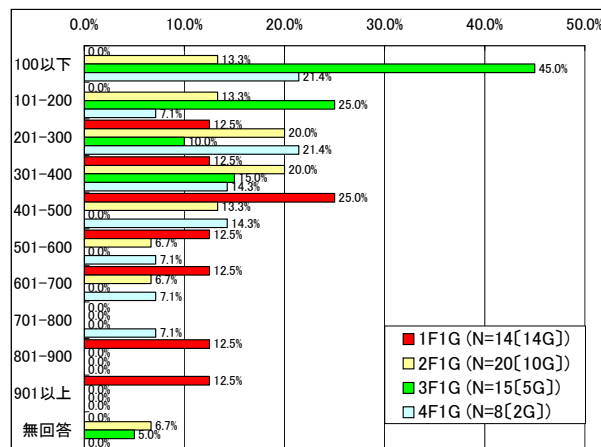


Fig. 3 家畜の保有状況

4-4. 遊牧民のライフスタイルについて

1) 遊牧民の1年間のライフサイクル (Fig. 4)

遊牧民の1年間のライフサイクルについてアンケート調査及び参考文献^{注3)}を基にFig. 4にまとめた。その特徴を以下に整理する。

・遊牧民はそれぞれの季節及び家畜の生態(生殖・飼養・搾乳等)に合わせて移動し、自然環境に適した場所に宿営地を構える。



Fig. 4 遊牧民の1年間のライフサイクル

- ・春営地と冬営地は通常近接していることが多い。
- ・宿営地に集まるゲルの数は自然環境に応じて変わる(概ね夏は集合し、冬は分散する)
- ・自然環境が厳しい時期(草が少ない時期、自然災害の発生時等)にはオトル^{注4)}を行い、家畜の飼料となる草を求めて移動する。

2) 遊牧民の移動性

①移動の頻度及び条件

Fig. 4 に示した通り、移動の頻度は概ね年4回であり、同じ場所で2~4ヶ月間を過ごしている遊牧民世帯が多く、グループ構成によって差異はみられない。

移動の条件・理由を自由意見より抽出すると、「家畜の肥育状況」「家畜の様子を見て移動距離を変える」「草原地の草や植物の量」「自然環境(季節の変化や気候等)に合わせて」「ガン・ゾドの自然災害の時は移動の回数が増える」等が挙げられた。

②移動する際に行う土地(自然)への配慮

移動する際に土地(自然)に対して配慮している事項を自由意見より抽出すると、「ゴミの処理をした後、土地の神様に感謝し乳製品を供える(儀礼)」「また戻ってくるので土地を元に戻すように出来る限りきれいにする」「人の手が加わって変えたものを全てを元に戻す」「モンゴルの伝統的な習慣を守って土地を掃除し、掘った穴を埋める」等が挙げられ、概ね全ての遊牧民世帯が儀礼・習慣・掃除への高い意識を有していると共に、保持していることが判明した。

3) 遊牧民のライフスタイルに対する意識

移動を繰り返す遊牧民のライフスタイルに対する意識を自由意見より抽出すると、「移動を繰り返すことは家畜の飼養に良いことであり、私達にも有利。美しい自然の中で暮らすことができ、健康にも良い」「いつも違う場所に繰り返し移動することで色々な人と出会え、新しい隣人が出来ることも楽しい」等、現在の遊牧生活に良い評価をしている世帯が多く見られた。一方で、「移動は大変」「定住スタイルの方

が良いと思う」と答えた世帯もみられ、その要因として「(社会主義時代に比べて)政府から遊牧民達への援助が少ない」「最近では牧草地をお金持ち達が所有しているので私達が家畜と移動できる地域が狭くなっている」といった点が挙げられる。

4-5. 近隣の世帯同士での協同(働)について

1) 近隣の世帯との付き合い (Fig. 5)

近隣の世帯との付き合いの状況に関しては、全てのグループにおいて「ほとんど近隣の世帯を知らない」の割合は0%であり、「親しくお付き合いをしている世帯がある」「生活していく上で協力し合っている世帯がある」が高い割合を占めている。このことから遊牧民世帯は単独の世帯のみで生活しているのではなく、他の世帯と関わり合いを持ちながら遊牧生活を営んでいると言えよう。

2) 協同(働)活動の内容

近隣の世帯同士での協同(働)活動の内容に関しては、家畜の世話(生殖・飼養、哺乳・搾乳管理)、草原の手入れ(草原地の管理、家畜の飼料となる草刈等)、フェルト作り、井戸の管理等、広範囲に及ぶ。また、より親しく付き合いをしている世帯では家事(病気の時の助け合い、子育ての協同等)や宿営地の移動の協力も行っている。加えて、日常生活の中での余暇活動(「テレビを見る」「酒を飲む」「子どもの遊び」等)においても近隣の世帯同士で互いのゲルを行き来しながら、密接な関わり合いを有している。

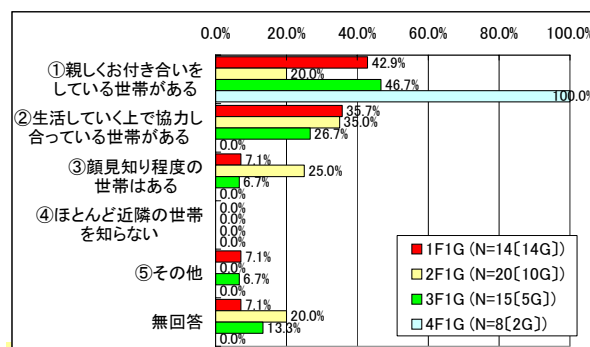


Fig. 5 近隣の世帯との付き合いの状況

4-6. 現在の遊牧生活への満足度及び継続意向

1) 遊牧生活への満足度 (Fig. 6)

遊牧生活への満足度^{注5)}に関しては、1F1G では満足層が 78.6%、不満足層が 7.1%である。2F1G では満足層が 60.0%、不満足層が 15.0%である。3F1G では満足層が 53.3%、不満足層が 26.6%である。4F1G では満足層が 75.0%、不満足層が 25.0%である。

各グループ共に満足層の割合が高く、満足層の回答理由では「受け継がれてきた遊牧生活を楽しみながら子どもたちといい暮らしをしている」「住み慣れたこの生活が良い」「家畜から貰う恵みで豊かな生活ができています」等が挙げられた。一方、不満足層の回答理由では「最近ガン、ゾドなどの自然災害が多くなっており、遊牧生活はリスクが高くなっている」「遊牧民の子ども達は教育水準が良くなり、最新の情報が入らない」「インフラ（水・電気など）や医療施設などの普及が十分ではない」などが挙げられた。

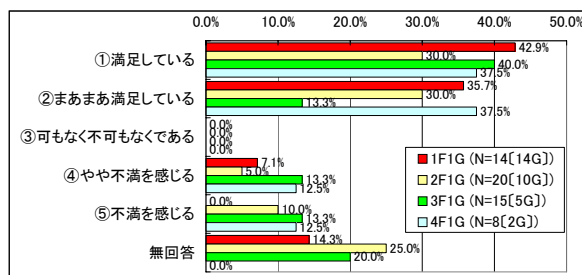


Fig. 6 遊牧生活への満足度

2) 遊牧生活の継続意向の有無 (Fig. 7)

遊牧生活の継続意向の有無に関しては、各グループ共に「現状を維持し、続けていきたい」「少々改善したいことはあるが続けていきたい」と答えた継続意向のある世帯の割合が多くを占めている。

継続していききたい理由では、各グループに共通して「現在の生活スタイルが気に入っているから」「経済的理由から」が挙げられた。都市に移住したいと思う理由では、各グループに共通して「子どもの将来を考えて」「病気の治療を受けるため」「より収入の高い雇用を求めるため」が挙げられた。

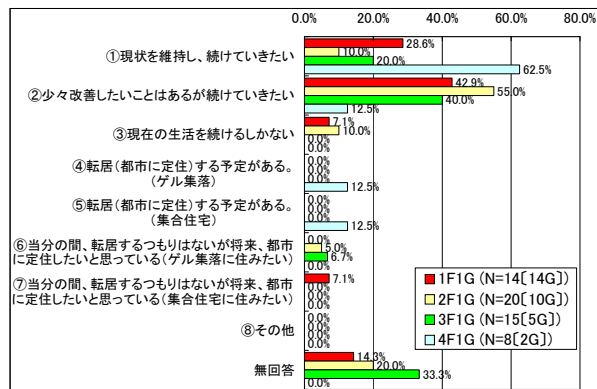


Fig. 7 継続意向の有無

5. まとめ

本研究より得られた遊牧民の生活意識及び生活環境に関する知見を要約すると以下のようである。

- ① 遊牧生活の糧となるのはマルとよばれる 5 畜（山羊・羊・馬・牛・ラクダ）であり、家畜は食用以外にも様々な用途に利用され遊牧民の生活と深い関わり合いを有している。遊牧生活においては、遊牧民自らが家畜や自然環境に適応し移動を繰り返しながら生活することにより、自然に負荷の少ない資源循環型の生活環境を創り出している。
- ② ホト・アイルは社会主義以前から存在するモンゴル遊牧民の近隣共同体^{注6)}であり、性質も習性も異なる 5 畜を保有し管理するために、遊牧民は協同（働）活動を通して近隣世帯との関わり合いを持ちながら、共同性を基礎とした生活環境を構築している。
- ③ 現代の遊牧民の生活環境においては、自然災害の増加、遊牧民の子ども達の教育の場の減少、医療施設の不足、土地の所有権の発生^{注7)}等により、都市への定住意向も顕在しつつあると考えられる。その一方で、遊牧民の遊牧生活から生み出される生活環境に対する満足度は総体的に高く、受け継がれてきた遊牧生活を楽しみ、自然からの豊かな恵みを得ると共に、自然に対して高い意識を有し、かつ、そのライフスタイルを継続していることが明らかとなった。それは、相互に遊牧民が協同（働）して、自然及び家畜と共生し、環境特性に立脚した持続可能なライフスタイルを営む方法論を独自に築き、実践し、展開していることを裏付けていると言えよう。

【注】

- 注1) ゾド（雪害）とは、冬の降雪により草が雪に埋もれて放牧が困難になることで、雪がなくて温度が低いだけの凍害もゾドと呼ばれている。ガン（干害）とは、夏の降雨量が少なく、草が育たないことである。
- 注2) モンゴルの遊牧民は白いフェルトで覆われた天幕（ゲル）に各世帯が暮らし、この世帯をアイルという。遊牧民は通常単独の世帯では生活せず、数家族が連なって生活している。このグループをホト・アイルという。
- 注3) Fig. 4 の作成においては、参考文献 2) 及び 5) を参考としている。
- 注4) オトルとは、季節的な宿営地の間の移動に加えて、更に別途移動する分派の移動であり、一部の者が（大抵は男のみ）家畜の一部を連れて移動する。ゾドやガンの時などには難を避けるためにオトルが多くなる。環境の変化に柔軟に対応するための移動の形態である。
- 注5) 「満足している」「まあまあ満足している」を満足層、「やや不満を感じる」「不満を感じる」を不満足層としている。
- 注6) 参考文献 3) によると、pp. 15 においてホト・アイルを「近隣協同体」と表現している。
- 注7) 2002 年 6 月に「土地所有法」（2003 年 5 月施行）が策定され、18 歳以上のモンゴル国民（世帯ごと）及び企業の土地所有が可能となった。

【参考文献】

- 1) MONGOLIAN STATISTICAL YEARBOOK 2005, National Statistical Office of Mongolia
- 2) 小長谷有紀：「モンゴル草原の生活世界」 朝日新聞社 1996 年 4 月
- 3) 島崎美代子他：「モンゴルの家族とコミュニティ開発」日本経済評論社 1999 年 7 月
- 4) 「遊牧民の建築術」 INAX 出版 2000 年 4 月
- 5) 小長谷有紀編著：「アジア読本モンゴル」 河出書房新社 2002 年 5 月
- 6) 木村毅：「モンゴルの真実」 中西出版 2002 年 7 月
- 7) 宮脇淳子：「モンゴルの歴史」 刀水書房 2002 年 9 月
- 8) 小長谷有紀編著：「遊牧がモンゴル経済を変える日」 出版文化社 2002 年 11 月
- 9) 小長谷有紀：「モンゴルの二十世紀」 中公叢書 2004 年 8 月